

昭和二十七年五月廿三日第三種郵便
昭和二十七年四月二十八日運輸省特別授承認第三五二號
昭和二十七年三月一日發行

第十八卷 第三號

浄土

三月號

淺春の光を待ちつつ

吉田絃二郎

隨筆五十回忌

北川桃雄

彼

岸

雲藤義道

再軍備と佛教

眞野正順

1952

3

天 意

將棋の木村名人が塚田八段に名人位を挑戦されて破れ去つた時の話。それ迄時間十五時間制であつたのを、塚田氏の強力な申入れで一舉に八時間に縮められた。十五時間制に馴れた木村名人としては極めて條件も悪く、彼の友人達は口を揃えてこれを拒絶するようにすすめた。その時、木村名人も色々に考え迷つたが、遂に一つの結論に達した。

「十五時間制では誰にも負けぬ自信がある。しかし八時間制で挑戦されたことは、これは天が塚田氏を通して、自分の力を八時間制で試練しようとするに違いない。そうであるならば自分は天意に背むくことは出来ぬ。塚田氏の挑戦に應じて立とう」

木村氏はかくて戦つたが、負けとなり名人位をゆづつた。これからの二年間、木村氏は血みどろで八時間制による勝負を研究した。「勝負の鬼」とも呼ばれる氏は遂にこれを自分のものとして再度立つて塚田氏に挑戦し、見事八時間制で名人位を奪いかえした。その時氏はしみじみ述懐している。

「もし塚田氏が八時間制で挑戦してくれなかつたら、自分は十五時間制に安んじていたであらう。まづたく天が自分に與えてくれた貴い賜物である。と同時に、塚田氏が前回十五時間制で挑戦しなかつたことは、塚田氏のために惜しむものである」

(勝負の世界より)

目 次

再軍備と佛教……………眞野正順(9)

厭離穢土……………須藤隆仙(16)

インドに生きている佛教……………佐藤賢順(24)

くすいれ……………内山憲尙(21)

五十回忌……………北川桃雄(17)

浅春の光を待ちつつ……………吉田絃二郎(1)

彼岸……………雲藤義道(5)

自慢で書いた額……………高橋良和(25)

「浄土」有縁の人々……………藤井實應(22)

アメリカの墓……………白井憲成(28)

青空と共に……………清水乙女(8)

芝園だより

永遠のいのち(四)……………佐藤良智(12)



浅春の光を待ちつゝ

吉田 絃二郎

故郷の未知の人から草餅を贈つて來た。釘付にされた箱を開くと、刹那に先づ故郷の蓬の香がかすかに打つてかゝる。じつと眼をつむつて合掌したい氣持ちになる。

柔かな草餅を掌に載せてゐる間にいろいろな感激が胸に湧いて來るのであつた。

先づ、見も知らぬ未知の人のやさしい心を思ふだけでも、この世に生きのびてゐることのありがたさを、しみじみと感じるのであつた。わたくしは衣食のためにこそかなり長い年月筆を執つたが、敢て世のため、人のためとしては一毫の努力もしなかつた。それなのに、未知の人から思ひも寄らぬ春の季節のさきがけとして、故郷の草餅を贈られた。

わたくしの心は明るくされた。冷たい現代の社會にもなほ温かな人の心は動いてゐる。羅刹の世にも、佛心はあたゝかに人間の魂をつゝんでゐる。それを思へば、生きてゐることはありがたい。

さらに贈られた草餅はわたくしに筑紫の春を懷ひ出させた。春が來たといふよろこびに胸を、をどらせた。わたくしはかつて讀んだ、或るポーランドの作家の物語を思ひ出した。それは長い冬の雪につゝまれたシベリヤに追ひやられてゐる二人のポーランド人が、ワルソウの郊外のライ麦の丘を語つてゐる間に、ふと、「緑」といふ言葉を思い出し「さうだ緑だ、緑だ。ぼくたちは餘り長い雪にとざされてゐたために、緑といふ言葉を忘れてゐた。おう、緑だ、緑だ！」と叫びな

がら、眼に涙を泛かべてゐたといふ物語である。かれ等は春を待つ心に狂ひそうだ。

わたくしは草餅をながめてゐる間に、そのポーランド人のよろこびに似たものを感じた。

わたくしにとつてはこゝ數年來、冬は肉体的に最も恐ろしい季節である。すでに夏のころから、來るべき冬を想うては心を暗くする。冬とともに左右の手は氷のやうに冷え、書物のページをめくるとも困難である。わたくしは太陽の光りを追うて、机を運び辛うじて讀書し、筆を執る。

雪の日、雨の日は元より、曇りの日もわたくしにとつては無慈悲な日である。わたくしはそのような日には手袋をはめて筆を執るが、血行の悪い指先はちくちく痛むので、筆ははかどらない。結局、日光のみがわたくしにとつては救ひである。

このようなわたくしにとつては、あたゝかな春の光りが近づいて來たといふことは、人一倍のよろこびである。緑といふ言葉を想ひ起こして涙を流してよろこ

んだポーランド人の心もわかる。

未知の人から贈られた草餅はまたわたくしに故郷の山を懷はせ、幼い日を想はせ、靜かにそこに眠つてゐる父や母を思はせた。

朝毎に佛前に合掌してゐた母の姿は幼いわたくしの胸に、遙かなる世界について思ふ心を植ゑつけた。無學な母はかつて一度もわたくしに宗教を説くこともなく、叱言をいつたこともなかつたが、母のやさしい眼と、靜かに合掌した姿とは千萬無量の尊い言葉をわたくしの童心にきざみつけてくれた。

今日はありがたい日であつた。或る仕事の用件で初めてわたくしを訪ねてこられた島津愛之さんと話してゐる間に、わたくしは島津さんが、法然上人を生んだ漆間家と血のつながりがあることを知つたのであつた。「漆間家の正統を繼いでゐるのは本家の人ですが、わたくしも漆間家とは血のつながりを持つてゐるのです」といふお話であつた。島津さんにさういはれてか

らふたゞ、島津さんを見ると、島津さんの風貌は、法然上人の御影にそっくりである。

島津さんは戦争に呼び出されて八九年も戦地の生活を送つて來られたといふが、武人としても容易に見出すことのできない雄偉な風貌である。背も人並はずれて高く、堂々たる風貌である。しかも切れの長い眼にはやさしさと叡智をたゞへてゐる。

法然上人が勢至丸時代に、すでに小矢兒こやごといふ名で呼ばれてをられたことなど考へると、その幼童のころからすでに上人は相當、弓矢を握るだけの腕と、人並すぐれた体力を持つてをられたことを相像することができる。

島津さんを通して法然上人を想像していると、法然上人とお念佛の唱へ方といふことが考へに浮かんで來るのであつた。このことについては、かつて、大島徹水先生がわたくしに語られたことがあつた。

「お念佛といふものは歡喜踊躍して申すべきものぢやと思ふ」と説かれてゐた。徹水先生は晩年に、山口縣

(?)の一孤島に巡錫されたことがあり、その島では昔ながらの踊躍して申す念佛が遺つてゐたことを發見したと語られたことがあつた。堂々たる法然上人の念佛の申し方は、恐らくさうであつたらう。

今日は島津さんに逢ひ、上人の御影を想ひ、上人を身近かに感ずるやうなきがした。まことにありがたい因縁の日であつた。

庭のつくばひの薄氷を破つて、新らたに水を取りかへてやれば、小鳥がうれしさうに羽根をひろげて水を浴びてゐる。春が來たのだ。

わたくしは春の日の光りを楽しみながら、今年の年賀狀の整理をしている。

そこには四十幾年前に對馬の兵營で別れたT氏からの賀狀がある。T氏は今年七十九歳の老人である。T氏には子供がなかつたので、亡くなつた兄の三人の遺兒を引き取つて育て上げたが、三人が三人とも、大學を出ると間もなく世を去つてしまつた。T氏は老夫人とただ二人切りで寂しい老後を送つてゐたが、その後

頼りにした夫人が腦溢血で倒れてしまつた。元、軍人のことゝて恩給は停止せられ、貯へはなく、病人を抱へて、十二三人の中學生や高校生たちに數學を教へて辛うじて生活を立てゝゐる。

さら年賀狀の中に長崎のUからのたよりがある。Uは小學以前からの幼な友達で、故郷の草山に山櫻が咲き、赤いぐみの實が熟れ、雉子が鳴くころになれば、わたくしは先づUを懷ふ。かれは大學を卒へて醫師となつたが、原子爆彈のために今日もなほ床上に仰臥してゐる。永久に起上る望みを失つて。

またそこには長崎のOからの賀狀がある。Oも五十幾年振りのたよりである。Oも亦その妻を、原爆の犠牲にさゝげて、一時は途方に暮れたと書いてゐる。

わたくしの手にはS子からのたよりがある。S子も小學校時代の同窓で、五十幾年來消息を聞かなかつたが、今年偶然のたよりである。かの女は夫に死別れ、二人の子を戦地に失ひ、かの女自身病みつゞけてゐるらしい。

わたくしはさらに尙ほ一枚の年賀狀を手にして、じつと、萬年筆で書かれた字面に見入つた。それは瀬戸内海に沿うた静かな町の養老院に孤獨の晩年を送つてゐる竹馬の友Kからのたよりである。Kの家は豊かな酒屋であつた。かれは級友の間でも最も幸福な環境に在つた。小學を出て五十餘年の間わたくしはかれがどのような生活を送つて來たのか、何も知らない。小學校時代のかれと、かれの兩親が熱心な門徒であつたことと、そしてかれが詩人的な純情の男であつたことだけを知つてゐる。寂然として養老院の縁端に坐つて、かれは近づいて來る春の光りを、如何に觀じつゝあるであらうか。

わたくしは掌の年賀狀を見ながらさまざまのことを考へさせられた。五人が五人とも人一倍の人間の苦しみを忍び、耐へて生きてゐる。

春の日の光りはやがてかれ等の心をも溫かにつゝむであらうか。

彼岸

雲 藤 義 道

『暑さ寒さも彼岸まで』と云う諺の如く、厳しい餘寒の名残りも何日しか遠退いて、今年もまた、彼岸の季節がやつて参りました。かんたんに、彼岸の意義について申上げてみたいと存じます。

彼岸と申しますと、誰しもすぐ頭に浮びますことは、昔から我國において、廣く行われて來ました、さまざまな彼岸の行事であります。もともと、彼岸の行事が佛教に由來していることは、皆様御承知の通りであります。長い間の傳統に培われて、我國の國民的行事となり、慣習となつておりますので、宗派の別なく何かしら、われわれの國民感情に融けこんだ親しみを感ずるのであります。それは彼岸の行事が國民大衆の間に心から楽しく受け容れられた事と、彼岸の季節が、春秋の快適な時期に相當していることにも、よるものと思われまゝ。春は春で心楽しく、秋は秋で心のなごむのが彼岸の季節であります。心豊かな氣持で、彼岸の行事を楽しんだ、われわれの祖先の生活感情は、いかにおおらかなものであつたことかと懐しく想像されるのであります。この彼岸の季節に行われる諸行事

それは全國の寺々で営まれる彼岸法要、墓参り、寺詣で、等の佛事・供養が、中心をなして居りますが、特に中日には各家家で草餅や團子を作つて佛前に供え、親戚知人の間に配つて健康を祝し合うのが習しとなつていた様であります。因に、牡丹餅は春のもの、「おはぎ」即ち「萩の餅」は秋のもの、いづれも春秋の彼岸に縁の深いものとなつています。かように彼岸は一般民間の忘れ難い行事となつたのであります。殊に淨土信仰が興隆してから、彼岸と淨土が密接な關係をもつ様になつてきました。これは彼岸の中日には太陽が眞東から出て、眞西に没することから、正しく西方淨土の方角を指示するものとして、その日の夕日を拜する「入日崇拜」の行事が盛んに行われました。特に大阪の四天王寺は昔からこの入日崇拜で有名であります。その他京都東山の「念佛踊り」、江戸の「六阿彌陀参り」、熊野地方の地獄極楽の「繪説き」、各地で民間行事が盛んに行われた様であります。又彼岸が丁度種蒔きの時期に當りますので、農家の風習と結付いて、豊作の祈りや、お初穂等の種々の農耕儀禮

と關係の深いことも忘れてはならないことでもあります。中には今日の生活とかけ離れた行事もありますが、兎に角、彼岸の行事は、國民大衆のレクリエーションを兼ねた佛教修行の週間であつた譯であります。近頃流行の何々週間の元祖は彼岸だという人もあります。

近時、時勢の激變に伴つて、我國の傳統的な行事が封建性の名の下に、次ぎ次ぎと崩れ去つて行く様であります。彼岸の行事などは正しい意味で何日まで守り伝えらるべき國民的行事の一つであるかと存じます。

さて、彼岸という言葉は、申す迄もなく佛教から起つたものであります。原語ではパーラミーまたはパーラミターと云い、漢字ではその音を寫して波羅密ハラムイと言つて居ります。佛語で六波羅密ハラムイという場合の波羅密であります。後にその意味を採つて「到彼岸」(彼岸に到る)と譯す様になりました。それを略して彼岸と稱しているわけでありましたが、もともと、パーラミターというのは「最高・完全」を意味する言葉であります。従つて此の惱み多き不完全なる世界を離れて、最高・完全な理想の境地に至ることが「彼岸に到る」という意味であります。佛教本來の立場から申せば、さとの世界に到る、佛道實踐の完成を意味しているわけであります。

ところが、不思議なことには、かような佛教本來の深い意義をもつた彼岸でありますから、盂蘭盆會即ちお盆の行事と同様に、印度、支那、日本と三國共通の佛教行事であらうと思ひ易いのであります。が、實際は日本だけに行われる我國獨特の佛教行事であります。なぜ、彼岸の行事が日本だけに發達したか、という事については、日

本佛教の特色から来る尊い意義がありますが、それと同時にわれわれが考えなければならぬ問題がひそんでいる様に思ひます。その問題は後で觸れることにして、先ず彼岸の行事の起りと發達の跡を一瞥して見ましよう。

通例、彼岸會の起りは、桓武天皇延暦二十五年に諸國の國分寺において、春秋二回の仲月ナツヅキに七日の間、金剛般若經を讀誦せしめた、事に始まるとされてはいますが、これは既に聖武天皇の天平七年より始まつていた、宮中の季節の讀經が轉化したものと考えられています。其後の記録によりますと、屢々玉體の安穩、人民の平樂、惡疫退散等のために、春秋二回、七日間の佛事を營んだ記事が出てくるによつても、彼岸に相當する佛事修行が盛んに行われたことが知られるのであります。かくして平安朝時代に入りますと、蜻蛉日記コナツノヒメや源氏物語等の文學書にも彼岸の文字が現われる様になつて、國民の間に深く根を下ろしたことが察せられます。

かように見てまいりますと、日本において彼岸會の起りました初期には、佛教本來の悟りの世界を憶がれるというよりは、鎮護國家、現世安穩を祈り求める氣持が強かつた様であります。そして、主として皇室を始め、上流社會に行われて居たようであります。彼岸會が一般化したのは、平安朝末期から鎌倉時代にかけて、淨土教が勃興し、國民一般の精神生活に淨土信仰が浸潤するに至つてからであります。

「淨土教の三部經典である、觀無量壽經の中に、淨土往生の爲めの十六種の觀法が説かれてありますが、その十六觀法の第一が日想

觀で、日没を觀想して、西方淨土の相を念すべきことが示されています。『支那の善導大師は、この觀無量壽經の註釋である「觀經疏」の中で、日想觀は春分、秋分の日に限るべきことを説かれました。これが彼岸の中日に日想觀を行つて、極樂淨土を念ずる大きな原因となつたのであります。更に觀經疏の中の二河白道の喩えに、この世界を東岸、極樂淨土を西岸と呼び、此岸より彼岸（西岸）に渡るべきことを説かれましたので、いよいよ、彼岸と淨土とは密接な關係をもつことになつたのであります。

彼岸の行事が弘く國民一般の間に普及する様になつたのには、淨土信仰が非常に大きな役割を演じた譯であります。平安朝時代の淨土信仰には、この人間世界を穢土として厭離し、速かに極樂淨土に往生せん事を願う、いわゆる厭離穢土欣求淨土の思想が濃厚であつたようであります。従つて彼岸の意味も、先きに述べたパーラミターの意義を離れて、速かに現實の苦しみ多き世界を去り、淨土往生を求める意味が強くなつて來たようであります。

日本独自の佛教行事たる彼岸が、上に述べた様な現世安穩や欣求淨土の思想にのみ支えられているのであるならば、誠に彼岸の本義にもとるものと云わねばなりません。日本佛教の特色も決して、そんなところにあつたのではなく、パーラミター即ち完全最高のさとの境地に到るべき、佛道實踐の理想を、凡夫たる一切の人々に容易く説き與えたところにあると思ふのであります。

われわれは彼岸の意義を、今一度反省して見なければならぬと存じます。お彼岸さまとして、日本の民衆感情に融け込んだ、國民

的行事を、眞に佛教の理想に貫かれたものとなさねばならないのであります。彼岸とは佛教の最高理想の悟りの世界であります。佛道の實踐の目標もそれ以外にはあり得ないのであります。人間は理想なくして生きることが出来ないものであります。佛陀の、み教によつて、われわれ人間にこの様な理想が掲げられたことは、大きな喜びと云わねばなりません。

然も、今一步進めて考えるならば、彼岸の理想は既に釋尊によつて成就されたのであります。即ち釋尊はさとりを得た佛とし、如來として彼岸の理想を實現して居られるのであります。われわれ凡夫衆生は、如來の光りに照されて、この現實を一步一步と導き育てられているのであります。

彼岸と現實とは決して相對立する世界と考へてはなりません。彼岸の光りに照らされて、現實はいよいよ力強い世界となつて來ます。彼岸への憧憬ということは、現實を捨てることではなくて、彼岸の光りに照らされた、現實の自己を發見することではなければなりません。彼岸へのあこがれでなく彼岸の認識と申さねばなりません。彼岸の認識、そこから佛は衆生の前に顯れて來ます。佛の慈悲如來の回向と云うことも、彼岸の光りが認識せられた者にのみ、始めて領受されるものであります。

現實の人類社會は、避け難き滅亡の不安におのひついています。今日ほど彼岸の認識が痛感せられる時代はないと存じます。彼岸の行事が日本の國民的なよき傳統に生かされつゝ、佛教本來の理想に貫かれて、少しでも現實の光りとならんことを念願してやみません。

青空と共に

清水 乙女

燦々と冬の陽が照つてゐる。濃い緑に静まりかえつてゐる常緑樹が暖かい光を受けて、明暗をつくつてゐる。

この静けさ、この美しさ、この和やかさ、平和が、自由がのびのびと天地にみちてゐる。日常のいらいらした雑念を離れて、みち足りた喜びに一瞬私は息づくのである。私の心に静かに沁み入る單純なこの喜び、一切を没却したこの平和、何物にも拘束されないこの自由！ この一瞬はいつたい誰が與え給ふのであらうか？ この時こそみ佛と共にある時と云ふのであらう！ かゝる境地に入り得

た一時こそ、私は有りがたい宗教の世界に生きてゐる心地がする。

私が見つめてゐる靜かな木々！ 一切を照らす明るい光！ 青い空！ そのどれにも宿つてゐる佛性の尊さに觸れ得る今の自分の幸いを自覺する。

自然は、如何なる見地から、如何なる角度から人間が見ようと、調べようと、決つして怒らず、おもねらず、曲げられず、いつも嚴然とその姿自體を現出している。純眞な心を持つもののみが、正しく自然を理解し、自然そのものの、すなわちみ佛のみめぐみに、浴する事が出来ると思われる。

冬の夜空にまたたく星の一つ一つ、きびしくそびえ立つ白雪の山々、洋々とひろがる青海原・岩間にせまらぐ谷川の水、霜柱をしのいで、いきいきと若葉をひろげる麥、あらゆるもの、宇宙そのものの、私の觀念の中のものまでも、皆み佛の姿をあらわしてくる。

われわれの祖先の一人一人、われわれの歴史の一つ一つが、過去のみ佛なのだ。現在に顯現するこの過去のみ姿は、今もいきいきと新しく、更にそのまゝのみ姿を未來永劫につ

づけ給うであらう。

ただそのみ姿を如何に觀るか——によつて批判は分れる。しかし私は靜心ない日常にあつて、一瞬の静けさをとらえ、一瞬一瞬を押し進めて、常時平靜にありたい。

宗教をもつて、阿片の中毒を人類社會に、まき散らすものと視ず、自然そのまゝの自由平等の立場にあつて、互助平和の生活を営む事が、み佛の力に生きる眞の宗教的生活であると思ふ。(筆者は白秋の高弟、淑徳學園教諭)

▼ウンと遊ぶといふ思想が湧く。遊ぶことは消費することではなく、精力や智識まで生産する。

▼奉仕と云うと、人へしてやる事のように思ふがそうではない。自分の爲めに自分の有りだけを盡す事を云うのだ。

▼政治でも、産業でも、宗教でもバックを持つことは發展のために大必要だがバックを持つ時、バックの爲めに殺される。單身勇躍沙漠の中を素足で走るような人間は愚だが、此の一人のみ死んで活きる——。(中野善英)

再軍備と佛教

——日記抄　その二——



眞野正順

一月〇日

この新春の小閑を、どうすごしたのか、と思つたが、ふと、氣づいて、書架から、梁高僧傳をおろして來た。この新しい歳のはじめに、虔んで往古の高僧の行蹟を偲んでみたいと思つたからだ。

求那跋摩ぐなはつま（A.D. 381—438）が、經本を携へて、西域からだんだんシナに近づいてきた途中、闍婆國に立寄つて、王や庶民から非常な歡迎をうけた時である。突然、隣國の大軍が荒々しく迫つて國內に侵入してきた。

（ 9 ）
その時、闍婆王は、ふと、心に惑ひを感じた。というのは、すで

に佛法に歸依し、平和の教を信奉しているかぎり、戦ひはあくまで避くべきである。しかし、いまや外敵の侵寇によつて、生民は危急にさらされつつあるが、そのまゝでよいのか。

『外賊、力をたのみ、侵侮せられんとす。もし、鬪戦せば、傷殺かならず多からん。もしそれ、拒がずんば危亡まさに至らんとす。』

王の當惑は、やゝ、現在わが國の識者の氣持に似通つてはいないか。さし迫る再軍備の問題は、平和新日本の理想に照して、これを如何に解決すべきか。軍備を全く具へざれば、おそらく、現在の朝鮮の荒廢や「二十五時」のルーマニアの到來は覺悟をせねばならぬ。さりながら、自ら兵器を執れば、既往六年遵奉し來つた新憲法の理想に背かねばならぬ。さらば、いかにすべき。世論は、それによつて、今も猶ほ區々である。ことに、平和をその主張の眼目となし來つた宗教家の惑ひは、さらに深いようである。

——しかし、この時、跋摩の王に對する應答は簡潔であつた。
『暴寇あい攻む、よろしく禦ぎ、捍ふべし、但し、慈悲心をおこ

し、害念を起す、勿れ。』

主は勇んで、自ら陣頭に立ち旗鼓堂々、たちまち敵軍を遠く退散せしめ、國民は歡呼して喜んだ。

○

しかし、跋摩の教諭はただ、是れだけでなかつた事は、注目すべきである。

しばらくして、王は、歡呼せる國民に向つて告げた。

「自分は、これから出家して佛道を求めようと思う。汝等は、ただちに良き君主を選ぶがよい。』

大衆は驚愕して、集り來り、口々に王の翻意を求めて止まなかつた。そこで、王は、もし汝等が、余の三つの願をきくならば、王位に留つてもよいと答へた。すなわち、

(一) この國土をあげて、佛法を奉じ、上人の教にしたがふ。

(二) あらゆる生類に慈悲の心をいただき、殺戮を事としてはならぬ。

(三) あらゆる國の富をあげて、惱める病者と貧者とを救はねばならぬ。

大衆は喜んで、これが實行を誓約したので、王は再び王位に還つた。

この前後の経緯は、かなり深い意味を含んでいる。はじめ、王は平和の教を奉ずるものとして、兵器を手にするを躊躇したが、やがて、決意定まつて、身を捨て、勇奮、敵を國外に撃退せしめた。これが、平和安寧を保持するの現實の道だつたからである。

しかし、勝利一たび定まつた後、軍備はそのままにしておけば、軍備はおのずから、その性質として國民を凶暴の心へと導いてゆく。兵器は、もとより、人を害する凶器だからである。

その勢力を放任すれば、どうしても次第に凶暴の道へと傾いてゆかざるを得ぬのである。禍亂の因こゝにひそむのであつて、戦勝者の崩壊は、やがてこゝに崩すのが常である。

それだけに兵備はこれを放任してはならない。これをその内部から支え、かつ、統御するところの強力なる道德的精神あつて、しつかりとこれを抑制し、かつ、指導せねばならぬ。されば、武器を持つたためには、必ずやまづ、それに先立つて、強烈なる道義博大なる愛念とを、その心に確立せねばならぬ。かくてこそ、その武備は、はじめて眞に平和を樹立するところの道具となり得るのである。戦勝に酔へる國民に向つて、王が、まず、その退位を以て脅かし、ついで人々をして、その衷心より三つの道義的誓約を信奉するの心を定めしめた所には、こゝに存したと解せられるのである。

この深い配慮が、王の師、求那跋摩の方寸に出でたものである事は、もとより推察に難くない。跋摩のこの指導は、おそらく「軍備」といふ社會現實的問題に對する佛教の態度として、ほど正當なるものと解してよいであらう。

「平和」といふ問題は、たゞ、目前に兵備をするか、せぬかの選擇で片づいてしまふかの如く考へる、世上の議論はあまりにも、觀念的である。軍備といふものは、もつと、深く人間性の本質にからみついてゐる深刻な現實である。

世界の窓

○今年は、日本は講和の年であらう。結局、具體的に、世界は、原爆をめぐつて原爆への實質的防壁を與へるもぶきみな對立が激化しよう。此の行爲、思想、生活方式によつたカール・ヤスパースは、ニューリーダーズ誌に於て、良心の存在、人間性、理性の存在を最も。人は生きてゐる限り、理性後のものとして強く主張してゐる。原爆の使用禁止の會合も、その「管理が受諾されるなら、單なる原爆の追放以上に意義があり、關係諸國が誠意を以つて會談する用意のあることを示すもので、それ自體恒久平和の端緒となり得る。だがこの見込は

「結局、具體的に原爆への實質的防壁を與へるものはないが、各人個々が、自らの行爲、思想、生活方式によつて原爆のあり得ない世界に突き進みうるを信ずるより外はない。人は生きてゐる限り、理性に窓を開いてゐる限り常に一切をこえて着實に透明に神が彼に求めてゐる隠れた目的に向つて歩むべきだとしてゐる。換言すれば、法爾の道理と、其に連なる各人の佛性の實在の確信こそ之を拒む最後のものであると解してよからう。——と——」

世界の窓

他力とは —— 一茶・おらが春より ——

他力他力と、一向に他力に力を入れて頼み候輩は、遂に他力繩に縛られて、自力地獄の焰の中へはたと陥り候。其の次に、かかるきたなき士凡夫を、うつくしき黄金の膚になて下されと、阿彌陀佛に押し誂へばなしにして置て、はや五體は佛染みなりたるやうにわる濟ましなるも、自力の張本人たるべく候。問ひて曰く、如何やうに心得たらんには御流儀に叶ひ侍りなん。答へて曰く、唯だ自力他力なんのかのといふ、あくたもくたを、さらりとさくらが沖へ流して、さて後生の一大事は其身を如來の御前に投げ出して、地獄なりとも、極樂なりとも、あなた様の御はからひ次第遊ばされ下されませと御頼み申すばかりなり。斯くの如く決定しての上には、南無阿彌陀佛といふ口の下より欲の網をはるの野に、手長鰻の行ひして人の目をかすめ、世渡る雁のかりそめにも、わか田へ水を引く盗み心をゆめゆめ持つべからず、然る時はあながち作り聲して念佛申すに及ばず。願はずとも佛は守りたまふべし。是れ即ち當流に安心とは申すなり。穴かしこ。

無量壽經講讀

永遠のいのち
(四)

佐藤良智

眞生往生人のありさま

永遠のみのちのくに、お浄土に生まれたものゝありさまを、釋尊は、阿難に、お示しになつた。しかし、清きみ國に生れたものゝ功德は、たとえ、百千萬却という永い間説いても盡きないと申されています。今、その一端を經典によつてのべてみよう。

先づ第一に、あみだぶつと、同様のおさとりを得ることができ、現に、觀世音ぼさつ、大勢至ぼさつの様な、代表的な往生人もまします。けがれたる世に於いて御修行され、安樂のみ國に生れ給うたのである。その御容姿は、ひかりかがやき、圓滿かぎりない。その御智慧は満ち満ちて、量り知れない。この容姿、智慧は、往生人等しく得るところであります。この様なお浄土の往生人も、穢れた世界に生まれ、その國土を淨め、ひとびとに、永遠のおんいのちを得させようと願うものは、あたかも、釋尊が印度にお生れになつたやうに、そのけがれたくにの、ひとびとのなかに、同じやうに生を受け、濟いの力を發揮するのは言ふまでもありません。

第二には、いのちの世界への往生人は、いたるところの、いのちの世界に、自由に生れることができ、生命をたゝえ、供養し、讚美しすることができ、美はしの華をもつて、音樂をもつて、旗をもつて。永遠なるもの、聖なるもの、そのなかに諸のみ佛まします。そのみ佛の眞實のことばをきくことができる。それは何と自由であり、歡喜ではありませんか。

第三には、往生人は、いつも、いつも、無量壽佛の説き給ふ眞理のことばをきくことができ、心滿ち、行い足る。このやうなとき、いのちのみ國のさまは、どうありましよう。よもにおこるかぜの音その音は自ら妙なる音樂を奏で、しかも、もろ／＼の華を雨ふらす。天人は、かぎりなく舞つて亂れ、香華を散じ、伎樂をかなでる。目を閉じて、しばらく、そのみくにを心に思ひ浮べようではありませんか。

第四には、永遠のみのちのくに、に生れたものは、み佛と同じやうに、眞實のことばをもつて、もろもろの人を、まことのくにに導くことができる。なぜなれば、眞實のいのちのくにには、小さ

な我に執着するころがなく、彼れも我れもなく、従つて、競走するとか、訟うとかのこともなく、たゞ唯、もろびとを、いつくしみはぐくむころのみある。ころは、いつもやさしく、怒り恨むことなく、眞理を愛し、眞理を求め、眞理をよろこぶころのみある。もろもろの迷いを滅し、悪いころは少しもない。あゝ、讃すべきかな。いのちのみくに。み佛のみくに。

第五には、自らを利益し、他の人を利益する徳が、自ら備わると申されます。

自分を利用する徳というのは、まず深い心の統一、を得ることができ。そのころは、通力といつて、ものを透徹してみ極めることができる。その深いころは、例へば、過去のことを知り、天眼といつて、すべてのものを見透すことができ、また、天耳といつて、どのような言葉、音聲をきくことができ、更に、他心通といつて、他の人のころも知ることができるといふ。神足通といつて、そのころのはたらきは、極めて敏速であつて、一瞬間に無限のくに、ゆきわたる程の力をもつている。そのうえ、漏盡通といつて、濁つた、迷いのない心となる。これらの通力と言われる強靱な精神力を得、その精神力が更に強化されて、明らかにされる。聞き、聞え、そして、訓練して得る智慧を具えている。また、往生人の心には七つの特色がある。これを七覺支と名をつけている。ものゝ眞と偽とを見分けること、精一杯に精神力を働かすこと、眞理を喜ぶこと誤れる偽れるものを除くこと、迷いのころを捨てること、統一した精神をもつこと、ころが平等に働くこと、これらの特色をもつ

て、佛の説き給える眞理を修するのであります。また更に、往生人は、五つの眼を具えているのであります。第一は肉の眼、この肉眼が清徹であつてもものの眞實を見るのであります。これはわれわれの、感覺の世界をはつきりと見ることに生れたものは科學の世界が明らかに見られるのであります。第二は、天眼であつて、ころの眼であります。このころの眼の力が最高度に發揮され無限に働くことが出来る。われわれの世界で言えば、肉眼は、物質的な、いわゆる眼であつて、天眼は、精神的な、いわゆる、ころの眼であります。このほかに、宗教的な三つ眼、即ち、法の眼、慧の眼、佛の眼、の三つをみ佛はお説きになりました。法の眼とは萬物の千差萬別に、差別していることをよく見、その眞のすがたを究めることができることとあります。慧の眼とは、智慧の目であつて、法眼が差別のすがたを見究めるのに對して、すべてのものゝ平等であることを見究めるのであります。佛教の術語で申しますと、すべてのものは、空である、と、見るのであります。この空は、申すまでもなく、何もないと、いふことではありません。すべてのものは、みな、相依り、相助け合つて、出來ている、縁起している、といふことであります。それが、主で、それが主でない、とは申されませんし、また、どれも主であるとも、申されます。すべてのものが、同じ値うちをもつている。これが、平等の理と言われるもので、この智慧の眼からすれば、すべてのものは、等しく、この上もないねうちをもつていることが解るのです。眞如の世界であります。この世界の眞實を見れば、能く理想の境地が得られるのです。五つ

の眼の第五番目が、佛の眼でありまして、往生人は、この佛眼を得て、眞理そのものを、語られるのであります。このような、すべて五つの眼を備える、ひとびとは永遠のおん命の、くに淨土に、榮えに榮えているのであります。

他を益するはたらきとは、お淨土の眞生往生人は、何物にもさまたげられることのない、智慧をもつて、人の爲に眞實を説き給ふ。世界は、もちつ、もたれつの縁起の空の世でありますから、言はば右も無く、左も無く、唯、漂つてゐる、きのまゝのいのちの世界であります。この漂ふいのちのまゝに生きれば、迷いは、はてし無く続きます。お互様は、この縁起のまにまに、生き、死んでゐるのであります。しかし、このわけがらが、一たび、わかれば、もはや、唯の漂のくらしでは、なくなります。ほのぼのと、求道の扉が、ひらかれて、くるのであります。眞生往生人は、この漂えるいのちの世界にあつて、強く、自ら、眞實のものを更に求めに求めるのであります。そこに、自ら、人を説く辨才が具わり、世のひとびとの、迷いのわずらいを除くことができます。この眞生往生人は、もと眞理そのものから生れ給ふたものであります。こゝで、如來さま、について申しあげれば、如來とは、眞如、眞實の世界から生れ來られた意味あいであります。われらの、永遠のおん命であらせられる、あみださまは、申しあげるでもなく、如來さまであります。そのあみださまのおんいのちのくに、淨土の眞生往生人は、もとをただせば、眞如眞實のみくから來生し給ふたものであることは、申すまでもございません。従つて、眞如、眞實そのものを知り

つくしていられるものであります。漂えるいのちも、ひとたび、如來さまの目からすれば、すべてこれ、眞實のおんいのちならざるはないのであります。このことを、佛典は、「法の如如を解り」と説かれて居ります。有難き極みであります。この往生人は、眞如から來たものの故に、迷いをどのようにして滅するか、その説法の方便もよく知り給ひ人のために利益されるのであります。その大いなる慈愛のこゝろは、遠く、深く、天地を貫き、生きとし生けるもの、みな、その慈愛の耳にのせて、眞實のみのちのくにに、渡らせ給うのであります。

更に、世尊は、經典を通して、これら眞生往生人の、眞理を説く能度と、その力とを次のように説き給うのであります。

眞生往生人は、内は常に眞理を求めに求めてやまず、外は、廣く眞理を説いて疲れうむことがなく、眞理の鼓をたゞき、その智慧は一切の暗黒を破り、人と和して人を敬ひ、眞理を廣く施し、ひたすらに精進して、心に、いさゝかもひるむことがない。世のともしびとなり、すぐれたる幸ひのみなもととなり、そのみちびきとなる。ひとすじに正しき道を求めて、他のよろこびを求めない。この眞生往生人の、すがたの、何たる崇高なることか。

更に、經典は、この人のもつ力について記している。あまりの力ずよさに、目がくらむばかりであります。その力の一つ一つを、目を閉じて、心に思い浮べるとき、眞實のいのちのみくに、みなぎる、諸の力の尊さに、いつまでも、いつまでも、こゝろをたれるのであります。今は、こゝろをしめて、唯、その力の名のみを記し、

讀む方方の、こゝろに送りたい。因の力、縁の力、意志の力、願の力、方便の力、常の力、善の力、定の力、智慧の力、布施、忍辱、精進、禪定、智慧の力、正念正觀の力、六通三明の力、眞理の前にもろびとを、ひれふさしめる力。このようなすべてのちから。――

最後に、眞生往生人のからだ、容貌、性格、辯才の完全に備はつてゐることを記し、更に、空、無相、無願の三三昧、――これは三解脱門とも言はれ、寺院の山門或は三門は、これをあらわしているのですが、――及び、不生不滅諸三昧門というような、佛教の最も高い、精神的境地に到達してゐることを述べて、これらの、かぎり無い功德は、若し述べようとすれば、無限の時間語り告げようと盡きることがないと申されています。永遠のいのちのみくにの、奥深く、かぎりないことを示して居るではありませんか。

保育用品

新學期用品

自由畫帖、おさいく帖、ぬりえ
出席カード、クレヨン、ハサミ
……良心的な當社の製品を

保育用ポンドン

美しい貼繪二二種でフランク
ルのグリーンボールを舞台に、
繪話、童話、觀察、メンタルテ
スト、算數ができる（一組二八
〇〇圓）

木製保育用具

ままごとセット、積木（大・中小）

運動遊具

△チャングルジム 二六〇〇圓
△ブランコ四人乗 二六〇〇圓
△大型スベリ台 二七〇〇圓
△太鼓梯子 一三〇〇圓
△遊動木 三〇〇〇圓
セメント基礎工事無料サービス

東京都杉並區西荻窪三の九五

愛育館

インドに生きている佛教

佐藤賢順

先頃ベナレスのヒンズー大學哲學科主任アトレーア博士が來朝して、大正大學で「印度文化の使命」について講演した。博士は印度の百萬長者ヴィラ氏の特派した文化使節である。講演の始まる前の暫くを、休憩室で雜談してゐるうちに、印度では何故佛教が亡びたか、と誰かが質問した。すると博士は少し御機嫌が悪く、「印度では決し佛教は亡んでいない」と答へて次のやうに説いた。「今の印度教は釋尊の教えそのものである。印度教では十人の神々を毎日拜むが、佛陀釋尊はその中の一人である。吾々は毎日釋尊を拜んでゐる。印度教こそ釋尊の精神を眞に生かしている。然るに西洋ではブッディズムとかヒンドゥーイズムとか何々イズムとかいつて佛教と印度教を切り離してしまおうとするが、それは西洋人の考えでアジア人の考え方ではない。佛陀の精神を眞に生かしたものは印度教であり、シナ佛陀であり、日本佛教である。佛教を墮落させたのは形式に拘泥つて發展しなかつた小乘佛教、セイロン佛教である。」數日前、増上寺法主椎尾増士にお會ひした時、この話をしたら、法主は、わしはアトレーアに會う機會がなかつたが、話の内容を傳え聞いて、當然の主張と思つてゐる。印度教は全面的に佛教を生かしている。わしもバリー佛典を材料としては盛んに使うが、材料として使うだけのことだ、というお話であつた。近頃、原始佛教、バリー佛教でなければ佛教でないかのように説き、日本佛教、特に淨土教などは釋尊の教えではないかとする説を散見するが、歴史と現實を知らぬ笑うべき短見である。

厭離穢土

須藤隆仙

かも知れないが、最近では自分が其の様な立場におかれて居る様な感じがして來た。

おそらく誰しもそうであろうが、人間は必ず悲しみを持つて居る。そして早く其の悲しみから抜けきりたい様な、いらだたしさを感じて居る。

あるひは其れが意識的に持續けられて居るか又は突發的に無意識の状態から急に意識される瞬間を持つて居るかいづれかである。

此の世が苦しみの世であろうと楽しみの世であろうと、穢土を厭離したいのは總ての人々が共通の願ひであろう。

其れは單なるフテクサレ的厭世感ではなく悲しみのある限り、苦しみのある限り、必ず抱かねばならぬ心情である。

他から強いられたものでもなく、徒に自己を悲觀視したものでもなく、其れは理くつを抜きにした實感なのである。

厭離穢土等と言ふと悲觀主義か何かの様に考へて居る人があるが、これは決してそう言ふ意味ではない。始めから終り迄唯此の世にいやみを感じて過すと言ふのではなく、現境

を脱して更により高次なものへと進もうとする動機なのである。

人間は常に現境に不満足である。小學一年生は決していつ迄も小學一年で居る事を望まない。いち早く二年生になる事を夢見、二年生は又三年生になる事を望んで居る。巨萬の富を貯へた人でもやはり更に大くの財物を望み、いかなる高職にある者でも尙一段と高い地位を望んで居る。其れは人間が現在の環境に不満足だからである。現境を厭離しようとするからである。常に高い所を望むと言ふ事は言換へれば、今現にある所を嫌ふ事でもある。

求むると言ふ反面には必ず嫌ふものがなければならぬ。そして其處に始めて向上も進歩も發展もあるのだ。して見れば別にトラピスチヌ天使團の修道女や、又、熊谷蓮生房直實のみが穢土を厭離したのではない。より高きものを求むる總ての人々が無意識の中に穢土を厭離して居る。唯その意識が表面立てられず裏面に存在して居るに過ぎない。

厭離穢土とは欣求淨土への裏面であり眞實の尊い叫聲なのである。

幼い頃トラピスト修道院の修道女を見て叔

母に、あれは何かと聞いた事があつた。

「あれはネ世の中がいやになつた人だよ」

と言聞かされて子供心に何かしら悲哀を含めた情を抱いた事があつた。

中學へ通つて居る頃熊谷蓮生房の出家を何かの宗教雑誌で讀んで、やはり唯何んとなく悲しくなつた事もあつた。

おそらくあの頃は、そう言ふ一見風變りな人々が何か可愛想に思へて、親の無い見等を悲しむのと共通した様な心理状態であつたの



—隨筆—

五十回忌

北川 桃 雄

昨年の秋の或る日、私は母の五十回忌を菩提寺のD寺で營んだ。

母は私が三才のとき亡くなつた。私には母親の記憶といふものは何一つない。茶褐色に變色した一葉の小さな寫眞によつて、わづかにその佛をしのぶばかりである。それは黒襟の拔衣紋ぬきえもんにした、明治時代の下町風の婦人の姿で、その面ざしに私の姉をみるこゝろができた。

私の母が三十八歳で亡くなつたとき、十三の女の兒を頭に六人の子が残された。三人の男の兒は私を長男として歳兒としごで、末弟は生れたばかりの乳香兒であつた。それだけに、母親として死にたくなかつたらうと思ふ。しかし、人生五十年夢幻のごとし、といふ。經つてみればまことにその通りだ。子供たちは、幼少で死んだ次男のぞいて、みんないつのまにか、母の年を越して老に入り、或いは老を追ひつつある。

娘に代つて孫を育てた祖母もとつくに亡くなり、妻に先立たれて七十何才かまで生き残つた父も、すでに死んで、廿年ちかくなる。母のことを記憶していることはもちろん、その名を知つてゐるものも、私たち肉親數名にすぎない。私たちがやがて死ねば、その記憶さへ消えうせてしまふ。

地上における凡人の一生を考へると妙な氣がしてくるし、淋しくもなるが、これが現實である。

さゝやかな法要に集つては、私たち親子三人と姉二人その孫の男の兒、宇治に住んでゐて來たがつてゐた弟は公用のため、來られなかつた。ほかに私にはまた従兄いとこになるNさんが來てくれた。Nさんは私たちには大叔父にあたる父親の代から疊職をやつてゐる人で、麻布八幡町に住むので、私たちは「八幡町」と呼んでゐる、りち氣

な、いかにも下町の昔からの職人といった人である。

その日、私は或る人から招かれて、銀座の或るレストランの午餐會にのぞみ、それが終えて雑談に入つたところ、中座して、車を驅つて聖坂のD寺に行つた。義理かたい「八幡町」ひとりちやんと先にきてゐて、本堂の隣りの座敷で住職のA師と火鉢をはさんで話してゐた。フランス式のスマートな料理屋から昔とほりの古いお寺の座敷に急に入つたものだから、その古さがひどく目立つた。D寺は江戸名所記の挿圖にもその名が出てゐる。

『お互ひすつかり年とりましたなア』

とAさんが云つた。

Aさんも、Nさんも、私より少し年長だが、長姉の話では、私同様、小供のときのAさんはすこぶる悪戯子だつたさうである。そのAさんも今は肥つて、立派な和尚さんタイプになつた。そうして、双方の親は皆死んで、親たちが營んだやうなことを今は自分たちが營んでゐる。やがて、姉たちも着いたので、本堂でA師の讀經がはじまつた。

この本堂の阿彌陀三尊も、古びた莊嚴具も、黒光りの柱も、あの單調で物哀しい誦經の聲とともに、私たちに

は忘れかねる、一つの雰圍氣をつくつてゐる。それは私の半生において、しば／＼出あつて悲哀をともなつてゐるのである。これは眞の意味で佛教徒とはいへないであらうが、ほかに別の宗教による信仰をもたないきかり、われわれ日本人は、自分たちの生活とつながりある、寺院の雰圍氣から、無意識のうちに佛教徒的心情をやしなはれてきたことは事實である。

こんなことを漠然と想ひながら坐つてゐたが、ふとみると、二人の姉たちはハンケチでしきりに眼をふいてゐた。私とちがつて記憶に残つてゐる半世紀も昔の亡母の倅が、胸に蘇つてきて、娘のときを思ひ出したのであらう。そして、また、それ以上にいろ／＼なものがこめられてゐるのだらう。彼女たちの涙は、なぜか私に女といふものの宿命の哀しさを感じさせた。

それから私たちは墓地に行つて墓詣りした。私の家内はうちから持つてきた庭の菊を一たば供へた。

この墓石の下には、私の祖母、両親、十才で死んだ長男が眠つてゐる。

いつかは私も骨となつて一諸に眠るだらう。

水をそそぎながら腹の中で私はさう呟やいた。

十數年前、獨り息子を亡くしたとき、私は短かい追憶の文章をかき、「歸路」と題したことがあつた。

どこへ歸るのか。私は息子の消へて行つた虚無へ自分もいつかは歸ると感じたのであつた。

それは理論ではなくて、たゞ私の實感からであつた。

そして、今も、私にとつて、その氣持に變りはない。……

夕映えの空が美しかつた。

皆はしばらく黙つて、何とはなしにその夕空を仰いだ。

——なんだネ、空もこんな所でみると妙な氣がするものさネ、

と、ふいにNさんが、獨り言のやうに云つた。

私の知識はもちろん客觀的に實在する「淨土」を否定するが、私の感情は、かうした美しい空をみると、そこに喜遊する亡き兒の姿をみる。それを護つてゐる祖母や兩親の姿をみる。昔の人の信心が、日想觀を考へ出し、山越の阿彌陀のやうな佛畫を生み出したことは故なきことではない。

私たちがD寺の門を出て伊皿子坂のはうへ歩いてゆく

ころには、夕空はみる／＼蒼ざめて、街には夜の灯がちらついてゐた。

その晩、私たちは一諸に食卓をとみにしながら、母をはじめ、亡くなつた身内の人々の事を語りあつた。しみりした情愛のあふれた晩だつた。

讀經や墓參や供養は、故人の冥福を祈る一つの形式にはちがいないが、同時にそれは、かうして故人を知つてゐるものがその思ひ出を語る、故人がその人々の胸によみがへつてくる、最も純粹な機會であらう。語る人々もやがては語られる人となり、そして、その兩者とも永遠に消へてしまふのだ。はかないといへばはかないが、それでいゝといへばそれでもいゝ。

若いとき、私は佛事といふと、たゞ何んとなく陰氣くさく、いはゆる抹香くさくて、できるだけ逃げる算段をしたものだが、年をとると不思議にそれほどでもなくなつた。因襲をきらふといふよりも、生きることしか考へない若い心と體の生長力が、死を考へさせられる機會を本能的にさけたのであらう。

寺院本來の目的が、單に、かうした法事を行ひ、死者

の靈を弔ふ場所としてのみに存するのでないことは私もしつてゐる。上代日本の佛教寺院として鎮護國家をもつて任じた大和の古寺は、今でも葬式も行はなければ、墓地もない。それも佛教本來の眞意義とは考へられぬが、末世の寺院が消極的な佛事を習慣的に職とするだけに終つた觀があるのも感心できない。が、それは別として、今の私の氣持が、かうした佛事に或る親しみといひを感じるのは、私の内に子供のときから沁みこんでゐる佛教的雰圍氣の影響が、老境に向つた私によみがへるのであらうか。私はこの事實をけつして不快なこととは思つてゐない。臘八(二十八日、釋迦成道の日)は全然無視して、(といふよりは知らないで)、クリスマスを新奇な異國趣味な風習として悦ぶ多くの日本人よりも、古くさくとも純粹な氣分になりうる日だからである。

客の辭するのを送つて外に出たら霧のふかい晩だつた。客と別れて、霧の夜道を引返して、ひとりしづかに歩きながら、姉たちによつて語られる亡母の佛が私の胸の中で私に呼びかけるのを感じた。

本會代理
責任取次

F. F. D. 幻燈機

F. F. D. 株式會社
東京 都 港 區
芝 田 村 町 三 ノ 七

..... スライド映寫機 (幻燈機)

◎ミナシキ58型B ¥12,880. 送料 ¥500. ◎マスター S50. B型 ¥11,880. ♫ ¥500.

..... スライド (フィルム)

- | | |
|-----------------------------------|---------|
| ◎玉虫の厨子物語—法隆寺にまつはる愛と藝術の悲しい物語 | ¥ 460 |
| ◎早耳のうさ吉—早耳で得意のうさ吉が早耳の爲大失敗 | ¥ 430 |
| ◎おしやかさまシリーズ—全五巻、釋迦の降誕から一生描く | 各 ¥ 430 |
| ◎白像の村—戰火に追はれ沙漠をさまよう人々を救う白像 | ¥ 460 |
| ◎二宮尊徳—貧しき農民のため困苦とたたかう尊徳先生 | ¥ 460 |
| ◎アルプスの娘—ヨハンナスピリ作、汚れしらぬ娘ハイジのもの | 各 ¥ 430 |
| ◎ビルマの豎琴(前、後)—文部大臣賞を得たビルマの豎琴のスライド化 | 各 ¥ 430 |
| ◎母を尋ねて—母を尋ねて三千里、海越へ山越へ少年マルコの話 | ¥ 430 |
| ◎幸福の王子—寶石と金で作られた幸福の王子が人々を助ける | ¥ 460 |
| ◎白雪姫—美しい白雪姫がさまざまの苦勞が幸せになる | ¥ 430 |

其他—作品300種、在庫豊富、目錄進呈致します。

x

湘南電車は氣持ちがいい、車體が新しい、窓が大きく通路も割合に廣くとつてあり、便所も氣が利いている。更に氣が利いているのはシートの横下に互いちがいに「くずいれ」がついていることである。

この「くずいれ」は、鐵で出来ていて、横側に、舌がついている、この舌を靴の先で一、二踏むと扉が左右に開く仕掛けになつてゐる。なかなかうまく考えたものである。感じも決して穢なくない。表にはちゃんと「くずいれ」と明記してある。

x

私は、湘南電車に月に一回位平均に乗つてゐるが、この氣の利いた「くずいれ」を利用してゐる人を殆んど見たことはないのである。

煙草のすいからは、足元へすてる、密柑の皮、南京豆の皮は遠慮なし、床の上へまきちらす。大人の人たちがこれだから、供たちは猶更らること、食べかすを所かまわずなげすてるのである。

であるから、切角新しい湘南電車の中は、相變らず、ごみ箱になつてしまつてゐる。

x

四歳になる女の子をつれて、伊東へ行つた歸りに、チョコレート紙を、この「くずいれ」に捨てる様に言いつけた。「お靴でふんで御覽、あきますから、したらこれをその中へ捨てゝ頂戴！」子供は教へた通りに靴でふんだ、扉は兩方にあいた。それが氣に入つたらしい。それから、キャラメル紙も、

くずいれ

内山 憲 尙

密柑の皮も一々踏んでは捨てるのである。——この子供にとつては、全く遊戲であるかも知れない。

x

遊戲であつてもかまわない。これを數回くり返してやらせれば、躰けになつてしまふのである。

「躰け」は案外、手近なところに落ちてゐるのであることを知らなければならぬ。躰

けを生活から切り離して考えていたのが今までの教育の缺陷ではなからうか。

x

「躰け」は生活そのものである。強制することではない、よろこんでやるところに本當の意味のしつけがあるのである。

x

私はこの原稿を伊東から歸りの汽車の中で書いてゐるのであるが。ここまで書いて來たら、伊東の温泉旅館で昨夜マージャンで騒いでいた、隣りのお客のことを思い出した。そのお客は厚生省の課長さん以下十數名であるとのことだつた。

今朝、その人たちが歸つた後、その部屋の前を通つて障子の明けはなされてゐる部屋の中を見るとはなしに覗いたら、マージャン臺の上にも、部屋の内中、密柑の間や、紙屑や、ウイスキーのビンらしいものなどが、散亂した坐蒲團とドテラと寢巻の間にちらかつていたのであつた。

x

「子供の躰けより、大人の躰けの方が難かしい」と思つた。

(筆者は保育學校長・駒澤大學講師)

「浄土」有縁の人々(四)

藤井實應

(十二月六日) 世田谷の萩原かず子夫人(故雲來博士の奥さん)の御病氣御見舞をする。

まだ寝たり起きたりの御容體であるが、殆ど病前とかわらないまでによくなられて、御一家の方にもおよろこびで、ありがたいことである。本月五月頃脳溢血で二週間ほど意識不明であつたが漸次決くなられて、この前十月に御たづねした時よりも一層快くなつておられた。病中の所感など承る。平素から信仰をもつてゐる方はこうした病氣の時に感謝の心まかせきつた心で養生せられるから一層快癒も速かになることであらう。どうぞ御大事にと申して辭す。

世田谷喜多見町慶元寺(山田鏡瑞師)へ。いつもは成城町公民館にて佛教講演と信仰坐

談が行はれるが、公民館都合で中止となつた由。慶元寺へは前住及び前々住からの御縁である。御住職は世田谷佛教並に浄土宗東京都區教化團等の理事を兼任、教化に盡瘁、奥さんは華道茶道の御師範として御活躍、夫妻共に教化にお忙しい。本堂の屋根の改造、大修理中である。半年ほど前であつたか、二人組の強盗に入られ刀をつきつけられたが、山田鏡瑞師は悠然として彼等の行動を暫く見守つたが、機を見て彼等に説法し、さすがの強盗も深く反省漸愧しておわび申し悔悟を誓つたとの話、浄土宗新聞に、くわしく記載されたことであつて、古の高僧傳に見る如き逸話を現實に於て爲された方である。

明るいうちにと申つて自轉車を拜借、粕江

村の富川茂さん方を訪ねる、奥さんは結核腎臓の爲満三年半も寝ておられる、その母上がずっと看護してをられるが、最近ロクマクを病つて暫く共に寝てをられた。この前十月おたづねした時にはお二人共寝てをられたが、けふは母堂は快くなられて起きてをられた。富川さんは京都帝大出身、日發に勤務、學生の頃から光明會の恒村夏山先生の指導により熱心な念佛者となられた、東京光明青年會の幹事もやつておられる。奥さんも恒村先生の光明會念佛會によく出席されたという。病人あると、ともすると家はくらくなり勝であるにかゝわらず、念佛の申さるゝ家は實に明るい、病人がある家とも思われぬ。二人のお子さんも明るく伸びくと育つてをられる。この頃は奥さんは寝ながら、主人の勤行念佛につれて念佛を申し、出勤の時は寝ながら合掌すると申しをられた。母堂も念佛を申さるるようになつたと。お念佛の話を暫くして辭する。この前參つた時に差上げた「病める人々のおとずれ」を有難く拜讀したとよろこんでおられた。合掌して御見送り下さるお姿が深く頭に残る。お念佛の世界は拜み合う生活である。

慶元寺にて泊る。公民館の集りが中止にな

つたので暫く本尊前にて念佛。早く寝に就く
 (十二月七日)午後、東澤九品佛例月念佛會
 講和「念佛と生活」に就てお話する。今日は
 釋尊成道の前日であるから惡魔降伏の意も含
 めてお話をした。念佛は惡魔降伏の生活とな
 る。講後、聽講しておられた池邊操さん(共
 生同人)特に訪ね來られて暫く語る。夜は豫
 定がなかつたので住職清水順碩師の御案内を
 うけて自由ヶ丘の映畫館にアメリカ映畫「北
 大西洋」を見る。清水師も映畫を見ること稀
 であるとのことであるが自分も映畫館で映畫
 を見るのは本年(廿六年)はじめてである。
 時間があれば時々見たいもの。仲々の勉強に
 なる。映畫見物に出かけた不在中に島崎さん
 が九品佛迄たづね下さつたが、お目にかかれ
 ず、残念なことであつた。

(十二月八日)昨夜珍らしい、おいしいココ
 アを頂いたせいか、寢についたが熟睡はでき
 なかつたようだ。寢られぬ場合は寢られぬが
 よいと思つてゐるから別に疲れは覺えぬ。け
 ふは釋尊成道の日。朝、九品佛開山堂にて念
 佛。釋尊の成道は彌陀光明の顯現である。釋
 尊の御本身は常寂光の無量壽身即ち彌陀如來
 である。成らは釋尊のみ教にしたがい、一心
 念佛して彌陀の光明に養はれて淨められたる

人となり。彌陀光明の中に生活をなし、命終
 らば大慈父彌陀世尊の御許に参り長時長勤に
 慈恩を報じ奉る。念佛の生活こそ人生眞實に
 生きる大道、念佛こそ無上無碍の大道、願は
 くは人々と共に此の無上道に精進せんこと
 を。臨濟宗鎌倉建長寺に於ける臘八大接心の
 ことが思い出される。淨土宗はじめ各宗とも
 此の成道日を記念に意義ある法要を盛んに修
 めるべきであると思う。

午後、豐島區千早町、成頼澄さん方の信仰
 坐談會に。午前に東成出版社へ出版の件で打
 合せをすませて早々成頼さんへ來たのである
 が、すでに杉本なほ夫人、宮崎安右衛門(童
 安)氏等が待つて下されてをり、まもなく菊
 地武之介氏も参加せられた。宮崎童安さんに
 は八月にもお目にかゝつたが、益々御元氣、
 「捨て身の生活」を最近、佛教文庫から出さ
 れる筈、無一物、捨身、貧者道の實踐體驗者
 である。明日のことを思ひ煩はず、今日のこ
 とは今日に足る、山上の坐訓そのまゝの實踐
 「聖フランシス」や「乞食桃水」の著者だけ
 に、それら聖者と同じような生活をしてをら
 れる。今日の自分の捨て身の生活を省みるに
 つけてもかゝる先覺者のあることは力強い。
 しかし一定の職業を持たぬことは一般人とし

ての範とはならぬ。一般人には一定の職に従
 事することが大事なことだと思ふ。又、一宗
 一派の信仰に据らぬところは實に自由であり
 何ものゝ束縛もないわけで純信そのまゝであ
 るが。またそこに微妙な問題が横はつてゐる。
 「呼吸と同じことで出し切ると自然に入つて
 くるものです」と言はれる。捨て切つた生活
 體驗から生る言葉である。

成頼さんは最近の身邊の種々の事件から、
 自分の心の中にこんな冷たい心があつたか
 と驚き、道にはづれた我が心に恥ぢましたが、
 日頃のみ教のおかげを頂いて平常の道にもど
 りえました、などの實態をお聞かせ下さつ
 た。境遇の如何によつてどんな心になるかも
 知れぬ。善人とは善縁にあえる人、惡人とは
 惡縁にあえる人、縁に遇ふことが同じくない
 から往生人にも九品の差別ができると申され
 た善導大師のお言葉が思ひ出される。所詮わ
 れわれは愚惡の凡人である。そしてこの凡人
 の救われる道は、常に大慈父のミオヤを念佛
 以外にはない。

夜は菊池武之介氏のお宅に。菊池氏は現在
 總理府特別調達廳の部長さんである。一高時
 代から柏心會に於て椎尾辨匡先生から教をう
 けられ、御夫人は御兩親と共に共生の教をう

けられた方、御夫婦共二十數年來の教友である。生長の家の教に熱心であるから自然お話しはその事にふれる。和やかな御家庭。いつおうかがひしても明るいよろこびの心をうけることができる。

(十二月九日) 午後、水戸市外酒門村定善寺

(狩野精道師) 佛教講演、「佛道の實踐」。午前八時十分上野發、水戸への車中、窓外を見れば空は澄みきつて美しく、沿線の景又格別に美しい、山川草木悉く法身のあらわれならざるなし、景色は單なる景色とは思われぬ。

念佛申して大法身をおがむ。狩野君は實に熱心な求道者である。十月東京を廻つていた際はわざ／＼東京にまで出て来て道を求められた。狩野君一人の爲にも共に道を語りあいたい。修證不二のみ教が尊く深んでくる。趙州從諗和尚が六十一歳の時「七歳の童子であつても、若し我れに勝らば我は即ちかれに道をたづねよう、百歳の老翁であつても我に及ばなければ我は即ちかれを教えよう」と發心、諸方を邊歴されたという芳觸が尊く偲ばれる。眞摯な求道はそのまゝ他の人のまごゝろを呼び起す。まごゝろとまごゝろのふれあうところが信の世界である。夜は狩野氏と信について又、教化の實際方法に就て語り、「聖き

みくに」の唱歌を教えてあげた。

(十二月十日) 茨城縣石下町西福寺(中島正方師)。水戸より石下への途中、取手の弘經寺(金田明進師)をたづねたが、住職不在、奥さんにあつて暫くお話、幼稚園の新築も本年中に完成とのこと。金田氏の不斷の教化精進に隨喜。辭して石下へ。西福寺中島氏の出迎へをうく。中島氏は淨土宗立布教講習所を出てから戰時中、北支北京にて開教に従事、終戰後歸つたから、北京開教の經驗を本にして教化に専念しておられる。夜は報恩講が新石下の中川善一氏邸にて行われる。横町婦人會員達も多數參加、はじめに動行、次に中島西福寺住職の幻燈「野口英世」「心の鏡」。幻燈の教化は今後とも一層普及せられるであろう。布教傳道といへば説教だけと思つたら大きな間違ひ、幻燈、映畫、影繪、音樂、人形芝居、劇、等々新時代に即した方法を講ぜねばならぬ。然し如何に新しき方法が行はれても念佛の實踐がないとそれは縁を結ぶにとどまる。眞實の傳道は念佛にあることはいふまでもない。幻燈が終ると、子供らは明日の學校もあるからとて歸らせる。そのあとで「報恩道」について語る。お話了つてから暫く座談。十念で會を閉ぢ、寺へ歸つて泊る。いつも東源

寺さんが隨喜御世話下さる。この報恩講は故中島勸誘上人の時代から行はれているところ。今日の時局では寺へ人を集めようとすることも實に困難である。在家での集まりを數多くすることが實際教化の方法として大切なことであると思う。

(十二月十一日) 午後、佛教居士會、「如來の光明に攝化さるゝ生活」について語る。居士會は檀信徒の戸主の人達が會員で、今までに寒修行として大寒入りの日から七日間早朝、寺に於て念佛禮拜する行が毎年行はれ、次回の寒修行には百名の參加を努力しようといふはりきつておられる。例月の念佛修養も行われる。會長は山中昇氏、その護法の熱心さによつて會も益々發展してゆくであろう。氏は昭和二十四年、此の地方の觀光團體に加わつて京都、高野山など參拜、歸路の車中で、擴聲器までつけて慰安會が開かれて、漫才、落語、流行歌などそれぞれ、かくし藝のありつたけをつくしてにぎやかであつた、山中氏が出る番になつたが流行歌も落語も出来ぬ氏は思ひ切つて「もろこしわが朝に」と一枚起清文を全身全靈の力を盡して拜誦した。拍手大喝采、あちらからもこちらからも名刺を出して今後の御交際を願うといわれたさうである。

童話

自慢で書いた額



高橋 良和

それは昔のおはなしです。いつ頃の昔かそれはわかりません。その頃京都の東山にあるお寺の清水寺に、大そう字の上手なわかいお坊さんがいたことがあります。このお坊さんはたくさんのお坊さんにまじって修業していました。

このわかい坊さんは自分が字が上手であると云うことをいつも自慢して、人にみせては、

「どうです。これはわたしが書いたのです、立派なものでしょう」と、みせては近所の人や、ほかのお寺のお坊さんたちにみせてまわりました。

さて、こんなに自慢してみせてまわっている間はまだよかつたのですが、だん／＼日がたつにつれて、身のほどもわきまえぬ大きなのぞみをおこしました。

そののぞみと云うのは、こうなのです。

この清水寺の御本堂には大きな額があげられています。その額の字が日がたつてうすくなつていくのに氣づいたこのお坊さんは、この額の字を自分で書こうと云うのでした。

ところがなんでもこの額は、その昔、待從大納言行成と云う御立派なお方が書かれたものでしたが、雨や風にさらされて、字はうす／＼くなつてや／＼と讀めるくらいでした。

わかいお坊さんはこれをみつけると大そうよろこびました。

「いゝものをみつけた、よ／＼この額に字を書いてやろう。」

そう思うと、たまらなくうれしくなつて、すぐ年上のお坊さんのところへまいりました。

「お坊さま、本堂の額の文字がすっかりうすくなつて消えています。あれでは參詣の方にも讀めませんから、私が一つ書きあらためましょう、どうぞごさいますか。」

と、とても自慢そうに申しました。

驚いたのは年とつたお坊さんです。

「めつそうもない、あれは待從大納言さまがお書きになつたもの、

お前のようなまだ修業のできてない若僧が書くものではない。」と、たしなめました。

けれども自分が誰よりも字が上手だと思いこんでいるこのわかいお坊さんは、なおもしつこく申しました。

「そうですが、ほんとうに字のみにえないものをそのまゝにしておくことは何の役にもたちません、ねえ、私が書いてみましょう。」

「それはだめです、そんなことをおししようさまにきこえたらとてもしかられますよ。」

と、年とつたお坊さんが申しまして、なか／＼きゝ入れそうにもありません。

「それはそうですが、なんとかして。」

と、なんどもなんどもくどく云つてひきさがりそうにありません。

「困つたことを云う人だ、身のほどを知らぬ。」

年とつたお坊さんもほとほと困りました。

「お坊さん、それではもし書きあらためることがいけないのなら、文字が消えているあとをそゝつとなでゝつくろつてはどうでしょうか。」

なおも年とつたお坊さんにつめよりました。

あまりのくどさに年とつたお坊さんも、とうとうあきれて、仕方がなくなりました。

「いや／＼それではいけない、もし外のところの墨でもついたりしてはお書きになつた待従大納言さまに申しわけがないでしょう。」

と、注意しましたけれどわかいお坊さんはきゝません。そこで年とつたお坊さんは手をやいてしまいました。

「つくらうだけです。」

と、云うことばを信じて、

「それなら字の消えているところをなでるだけですぞ。」

と、云うのでついに許すことになりました。

よろこんだのはわかいお坊さんです。

「しめたしめた、今こそわしの字の上手なことをしらしめてやろう」

心にきめたお坊さんは、額をそゝつとおろしました。

そしてまず額の生地(きじ)をうわぬりました。それが終ると、

まつ黒に墨をすつたすずりに筆をおとして、たつぷりと墨をつけて

待従大納言さまの筆のあとにしたがつて、その上をなでました。

しばらくしているうちに額の字はみちがえるようにはつきりと讀

むことが出来るようになりました。

わかいお坊さんはいよ／＼お得意になつて、

「どうです、見事なものでしょう、待従大納言さまが書かれた通り筆でなでたにしても、この清水寺ではわたしをのぞいて誰も出来ないことです。」

と、みんなのお坊さんたちにいばつて自慢して歩きました。

さて、それまではよかつたのですが、それから一時間もすぎたときでした。

「雨が降つてきたよ。」

「夕立かもしれないよ。」

「おや 雲の早いこと。」

みんながにわか雨でおどろいて空をみあげたとたん、みる間にいなびかり、雷がなりはじめ風がビュウ、ビュウふいて、大嵐になりました。

「本堂は大丈夫ですか。」

「屋根の瓦は。」

みんながあわてふためいて生きた心地がしないほどの大雷雨だったのです。

清水寺のお坊さんたちはみんないゝ合せたように御本尊さまを一心に念じました。

嵐の間に――お經の聲が流れていましたが、御本尊の御利益か、しばらくすると、さしもの大嵐も次第におさまり、一時間もたゝないうちに大雷雨もおさまつて、もとの青空があらわれました。

「あゝ、おそろしかつたこと。」

「境内や、建物はどうなつたかしら。」

お坊さんたちは手分けして寺の中をみてまわりました。

不思議ではありませんか。

本堂も外の建物も、そして境内の樹木もなに一つ損害はありません。

「まあ、よかつた、無事で。」

みんなが安心して、本堂のあの額をみあげると、どうでしょう。

あんなにまつ黒な墨でさつきわかいお坊さんが書いた額の字は、すつかり消えてしまつて、またもとの通りになつていてはありま

せんか。

「不思議なことだ、この額だけが。」

「そうだよ、さつきのあの大雨はあのわかいお坊さんのなまいきな心をたしなめられた佛さまのはからいかもしれないよ。」

外のお坊さんたちはこんなにはなしあいました。

さてそればかりではありません。

それから一週間もたゝないうちに、あの字の上手なお坊さんはどうしたとか急に死んでしまいました。

どんな病か誰も知りませんが、自分の自慢から立派な額をよこしたから罰があつたのだとみんなの人たちは思うようになりました。

浄土トラクト

B五半截・十六頁
價 七圓 送八圓

一枚起請文

宗祖信仰の本質を、新しい思想と深い信仰とで指示せる必讀の書

浄土シリーズ

文庫版 四頁(價)二圓
百部以上二・八圓 三百部以上一・五圓(送料)五十部
毎八圓

大野 五重の 話

竹中 信常 お 彼岸

藤田 寛雅 お 十夜

前田 龍海 参詣手帖

(お塔婆・お墓・位牌・お珠数・法事)

アメリカの墓

——わが開教日誌の一節より——



白井憲成

ホーレス・ローンと大きく書いた看板を街の所々で見ることがある。

若し日本語で言へば、森の芝生とでも言へば良いのか、とにかく正しくは、ホーレスト・ローン・メモリアル・パークと書いてあるから、その名前からだけで判断すると、森の中にでもある記念公園位にしか思へない。

しかしこれは、ありふれた公園ではない。お墓なのである。それが證據には、たしか一區劃何ドルと書いてあつたようにも思う。お墓の話となると、我々は普通あまり感じのよいものは聯想しない。陰氣な木かげ、しめつぽい空氣、じめ／＼した土地のしめり、こりいふ環境は、我々のお墓にはつきものゝやうである。

所が、このホーレスト・ローンと云ふ墓はクリスト教の墓なのである。クリスト教と云へば、佛教の墓とは少しは様想も違ふだろうと、思はれるかも知れない。しかしたとへクリスト教だと言つた所で、墓は墓なのである。死者の憩ひの場所に、別の雰圍氣が出て来る筈はないともいはれよう。日常の我々にとつて、お墓は縁遠い場所である。たとへ妻子眷屬が葬られても、としつきが経つと、やはり又遠い世界になつていつてしまふのである。

る。

所がこのお墓は、一度、二度、三度と何回でも足を運ばせるように出来ている。そこにこのお墓の面白さがある。そこでこのお墓の點描を試み乍ら、その創設者の構想を紹介しよう。

詳細な點描を試みる前に、先ず創設者の抱負に耳を傾けよう。

創設者は、ハーバート・イトンといふ實業家なのである。アメリカのフーズ・フリーと云ふ人名辭典には、彼が一八八一年に東部に生れてから現在に至る迄の詳細な經歷がなが／＼と記載されている。多くの會社、銀行を經營する實業家としての經歷は、此處では大して問題とはならないが、たゞこのお墓の創設者が實業家である事だけは、記憶にとめておく必要があると思ふ。

それと同時に又最初に、このお墓も大きな一つの企業であることも斷つておかなければならない。企業と云へば、アメリカでは、葬儀社も墓地も、僧職・教會の手から離れて、民營化されている。日本で見られる如きものとは比較にならぬ程ビジネス化されている。葬儀所は立派な教會におとらぬ莊嚴な會堂を持ち、死んでから墓地までの一切の手續きは

此處で至極簡単に行はれてしまふ。全てをビジネス化するアメリカでは、極めて合理的に非常なサービスぶりをもつて、處理されて行く。だから此處にホーレスト・ローンと云ふ様な大規模なお墓が、一つの企業として成り立つたとも云へるかも知れない。

しかし、このホーレスト・ローンが普通の葬儀社とかお墓だけだつたら、やはり誰か死人でも出来ない限り、そんなに何回も足を運ばせる理由はない筈である。こゝに創設者特有のアイディアが伺はれるのである。

キヤリフォニア州のグレンデールと云へばロス・アンゼルス市の北部の山手にかけて、ロス・アンゼルス市と續いた町である。その山は普通マウント・ウイルソンと呼ばれる高い山と續く。この山のすそが、ロス・アンゼルスの方に向つて、ゆるやかに起伏する見晴のよい小山、こゝにホーレスト・ローンがある。この山全體を墓としたものである。

舊赤坂離宮を思はせるやうな、立派な大きな門が開かれている。自動車は二列に行儀よくならんで入つて行く。門から出て来る車も同じように、二列に行儀よくならんで、絶える事がない。門を入つた所で、次々に鄭重に渡される贅澤な案内圖を見て、先ずその規模

の大きいのに驚く。その寫眞入りの美しい案内圖からは大體次のような事が伺はれる。

『この世を去つて行く人々には、我々は最後のつとめとして色々な事をしなければならぬ。花を供へる事も、野邊の送りをする事も法要儀式を営むことも、更には墓を建て、埋葬する事も、死者に對する我々の最後の贈物なのである。所がこのホーレスト・ローンでは、お好次第で、あらゆるものがこの一個所で整へられるやうに準備してある。この一個所で時間も浪費せず、經費もかさまずに全てを済ますことが出来る……』そして『一個所に全てが準備されている、アメリカでも、もつとも美しいお墓、ホーレスト・ローン』と大きく書いてある。又裏がわには、

責任をもつて鄭重にあつかふ 葬儀所

永久に責任をもつて手入する 墓地

永遠にくちることのない 大聖廟

美しい花の教會にある輕便な 火葬場

無料でサービス出来る二つの古い 教會

新鮮な花を即刻お届けする 花屋 等々

と廣告してある。

これだけを見ると、葬儀所、墓地、聖堂、火葬場、教會、花屋等、人間がこの世を去つてから、最後の住み家に落ちつくまで、當然

御厄介にならねばならないものが、全部整えられている事になる譯である。所が、これらのものがどれだけ大きな規模で配置せられた所で、大して我々の注意をひく理由にはならない。要するに死人が出ない限り、關心もよばないにきまつている。そして又、火葬場や、葬儀場をどんなに立派にした所で、そこに集る人の數はしれている。そこでこの創設者はこの山手のスロープを利用して、この墓を公園化したのである。こゝに創設者の構想のユニークな所があつた譯である。

最初入つて來た門の左右には、イギリス風の建物が、森にかこまれて、實に落ちついた感じを與へる。それは外の世界が、原色版のあかるさを持つてゐるだけに、世界が變つたやうな印象を與える。

その建物は、事務所、葬儀所等であるが、決して、黒わくで圍まれたやうな陰氣な感じを與えない。丁度大きな邸宅とでもいつた感じである。ここを通りぬけて、道は山手にかゝつて行く。

山をぬふドライブ・ウエーで區切られた土地や又その道は、全てクリスト教にふさわしい名前がつけられている。黒化する森と建物以外の地は、全てきれいに手入れされた芝生

が、ゆるやかに起伏している。この見晴しのよいスロープは墓地として分譲されている。

普通三尺の六尺が一區劃とされて最低三十三ドル、葬式料は六十ドル以上と廣告されている。日本のおかねになほせば、随分高價にも思はれるが、アメリカの墓の相場からすると格安である。

日本の墓のやうに、墓石はたてないで、地に石をうめるから、丁度ゴルフ場を想はせる。そして又日本の墓の不規則に並んだ墓石の列から受ける印象とは違つて、たしかに、古人の憩ひの場所にふさわしい静けさを持っている。

側に車をとめて、燦々と降る太陽をあび乍ら辨當をひらいている人もいる。お墓で飯を喰ふやうな光景は、日本ではちよつと想像も出来ない。ドライヴ・ウエーが靜かにカーヴする所には、きまつて大きな大理石の彫像が立てられている。これらは全て、文藝復興期のイタリヤの藝術作品のイミテーションである。そしてその彫像には、ながくとそのの意味が附け加へられている。ゆるやかなスロープの芝生の上に點々とおかれてゐる花束は墓をもうでた人のものだらう。墓特有の陰氣さは感ずる事が出来ない。その區劃に憩つて

いる人々は、そこに立つてゐる、偉大な藝術的遺産と共に現に生きてゐるといふ感じをいだかせる。

山の中腹にある、大きな建物の前に出る。

これは、大聖廟とでも呼ぶのか、とにかくこのホールレスト・ローソンの中心の建物である。

幾棟かの大理石作りの贅をつくしたゴテイツク建築の中に、有名な、レオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」の圖を模した、ステインド・グラスの窓がかゝつてゐるのである。

イタリーのミランにあるこの原型を見る事は、我々にはとても不可能である。所でこの「最後の晩餐」の圖が、アメリカでも唯一人の色がらす職人に依つて、確實に色がらすに移され、原型以上の効果を出すのに成功したと云はれてゐる。

人々は、お墓よりも、これを見に集つて来る。前以て日時を豫約しなければ見られない程、おびただしい人がつめかけて来る。

非常に靜かで、重々しい建物に、先ず入るみがかれた大理石の廊下、壁、左右に列べられた幾多の彫像は、全てクリストにちなむ作品ばかりである。靜肅な、そして敬虔な參觀者の列は、しばらくしてこの大きな、ラースト・サバー・ウインドーの前に出る。

「窓」に向つてならべられた椅子につき／＼と人々はすわる。しばらくすると、莊重な音楽と共に、クリストの最後の晩餐についての説教が始まるわけである。參詣者の見入つてゐるこのラースト・サバー・ウインドーは、説教と共に、靜かにかかるみに出て来る。靜かに又強ずよく進められる説教は、照し出される畫面の明暗とよくマッチして、觀衆をしばらく宗教的神秘の世界へ誘つて行つてしまふやうである。其處には、牧師の姿も、ヨソイア（聖歌隊）も見られない。たゞ畫面から迫る力と、これに應へる觀衆だけがあるのである。人々は此處では、教會に於ける以上の宗教的な敬虔の感情にひたるわけである。

その説教が終つて、觀衆は廊下を通じて、陳列館に案内される譯である。所が驚くことにこの兩側は全て遺骨安置所になつてゐる。丁度大きな簞笥の様に、安置されている人の生年月日から死亡年月日までが銅版に刻まれて、アパートのやうである。建物全體が遺骨安置所といった所である。がしかしそれが同時に、大きな美術館でもある。と云ふのは、ミケランジェロの作品の寫しを始めとしてクリストに因むおほよそ四百點の古今の大理石の彫像が配列され、窓は全てステインド・グ

ラスに依つて裝飾され、實にイタリー文藝復興期そのままの世界である。たしかに聖の殿堂にふさわしく、全てがキリストと共にある天國を、この地上に再現した姿である。更にこの建物を一周する中に、この創設者が、宗教、藝術、歴史、教育の全てを、この一區劃の中に凝集させようとしている意圖がわかる。即ちこのホールレスト・ローンの中に、キリスト教的世界が要譯されているといった形である。そしてそれが、このアメリカの歴史にも通じている譯である。詳細に見る爲には一日もかゝるこの陳列館式の聖堂はこの中の一つの主な建物に過ぎない。これは確かに、教會や僧職の手を離れた宗教運動と見た事が出来る。あらゆる條件を具備した環境を作ること

に依つて、人々はたゞその地を踐むだけでしらず、宗教的世界へと足を運ぶのである。

墓とは云ひながら、そこにならべられる幾多の歴史的な藝術的遺産に依つて、そこに憩へる人と何等の斷絡をも感ぜしめない。これは墓を現實の人間に結びつけた。たしかに新しい着想である。したがつて多くの人は、生きてゐる中に、この安住の地を豫約してしまふのである。

こゝを出た人々は、各々再びお墓のドライ

別の小高い山に、又も大きなゴシック式の建物がそびえている。これが有名なジャン・ステイカと云ふポーランドの畫家の書いた、世界最大のキリストの苦難の圖を藏している建物である。

先ず、敬虔な面ざしの人々の列にしたがつて、その會堂に入る。大劇場をおもわせる様に、正面にたれ下つた幕に向つて、椅子は美しくゆるいカーブをもつてならべられている。丁度音樂堂にでも入つた感じである。時に騒音を防ぐために、豪華な縦縞がひきつめられ、會堂内の照明は又、心理効果百パーセントといった所である。靜かにながれる音樂に依つて、千以上もある坐席に人がすわるまでの長い時間、何の倦怠感も與えない。正面のステージと思はれる所にたれさがる幕は、明暗の照明効果から、實に壯嚴な感をいだかせる。人々はたゞこの會堂に入るだけで、世事の騒音から遮斷されて行つてしまふ。正面のステージと觀覽席との間の、みがきすまされたひろがり、時折大演奏會に使用せられるともきいた。敬虔な雰圍氣は、人々を不識の間に、神秘的感情の世界へと導く。

しばらくの間、たゞこの壯嚴な雰圍氣に陶

醉せる如く、それは丁度、佛教に言ふ寂靜三昧にも比す可く、人々は努力する事なくたゞ自らの内なる世界へと走つて行く。それは又深山幽谷にも似た靜けきである。

突然音樂のたかなりとともに、正面の幕は音もなく開かれる。重さが三千五百ポンドもあると云はれるから、その大きさも想像されよう。幕がひらかれるに應じて、その中に、長さ二百フィート、高さ五十フィートのキリスト苦難の圖があらはれるのである。

この畫に見とれる中に、音樂はやみ、靜かに説教が始まる。キリストの生涯の歸結としての大苦難がこの畫を通して、靜かにやわらかく、莊重みをおびた説教と共に迫る時、觀客を、キリストとその時代にひきやつてしまふのである。時間的、又地理的な隔りを越えて、人々をキリストとその時代にひき入れてしまふ。ジャン・ステイカのこの大作が、こゝに落ちつく迄の數奇な運命は、こゝに多く語る必要もなからう。しかしそれよりもこの大作が語り告げるものは、神の福音であり、キリストの苦難の生涯であらう。たしかに、二十世紀の近代を、この瞬間に、キリストの時代に、そして又、アメリカと云ふ近代文明の場所を、一據に、エルサレムの地に結びつ

けるのである。

説教は、この偉大な畫家のこの大作完成に到る敬虔なる聖地巡歴を以て終り、再び莊重な音楽と共に幕は閉じられるのである。

この間一時間、人々は世俗を離れて、宗教的世界に遊ぶのである。又再び靜かに開かれるドアを通つて外に出る。夢の様である。

これはたしかに生ける教會である。聲をからしてとなりちらす低俗なる説教もなく、又聖歌隊の喧噪もない。たゞ作られた環境の中に集る各々が、自分の中に教會を作るのである。たゞこの創設者は、この環境を作るだけにあらゆる創意工夫をこらしたに過ぎない。

私は再びこゝで感じた。要するに「宗教は自然」であると、そして又「人間は本來宗教的である」と、

こゝを出てから、更に多くの古いイギリス風の教會を見る事も出来る。又、點在するミケランジェロの半像の前に立つ事も出来る。

しかしこれを一々訪ねれば限もない。そこでこの墓地から受けた印象を要譯して見る。

このホールレスト・ローンの創設者は、實業家であるが、又お墓の研究家でもある。

一般に、お墓は死者のみの憩ひの場所と考へがちである。所が彼はお墓を死者だけの世

界と考へなかつた。

お墓が、我々の現實から縁遠い世界になつてゐるのは、たとへ我々が何時かは又誰もが必ず行かねばならぬ場所とは言へ、それが死後行く世界だからである。過去の全ての人が憩ひしてをり、又我々も訪れなければならぬお墓は、我々の生の終局には必ず待ち受けてゐる。所がこのお墓が、我々の時々刻々にながり乍、この世を遮斷する死の故に、はるか遠い世界におしやられてゐるのである。

彼は、我々の足下にある乍ら、常に縁遠く感じようとするお墓を、じかに結びつけようとした。そこに、彼特有の新しい構想が生み出だされたのである。

彼は、お墓と現實の我々の生活との間に、單なる肉體的な死だけをおかなかつた。肉體的な死の背後に歴史的・宗教的な生、即ち永遠の生をおいたのである。しかも彼はただこれを觀念としてでなく、集められた多くの藝術品に依つてあらわしたのである。

不朽の名作を集める事に依つて、それらの藝術が示す宗教的生命に依つて、墓地に眠る人々をよみがえらせようとしたのである。即ち現實の死の悲しみを、今眼前と見る、不朽の作品を通して神の榮光の輝きにおきかえた

のである。お墓を死者のみの世界としてではなくして、現實に生ける人々にも通ずる神の國におきかえたのである。區劃に名づけられる名稱も、それに立つてゐる彫像も、神の祝福の名にちなみ、それらが不滅である如く、憩へる人々の不滅にも通ずるのである。

即ちこのめぐらせられた、歴史的に、宗教的に不滅に輝く藝術品に依つて、憩へる人々の不滅を證明してゐるのである。したがつてこの構想は、一劃には、古い教會を模し、美術館をもたて、葬儀のみでなく、結婚式もどん／＼やつて行くのである。

お墓で結婚式と言へば、異様にきこえるが此處では何等不自然な營みではない譯である。お墓で音楽會も、又お墓の散歩も不自然ではなくなつて來る譯である。お墓を宗教・藝術・教育・歴史の中心とした着想は、『アメリカに於ける唯一の革命的なお墓』の名にふさわしいものである。

集り來る人々は、宗教藝術を見、歴史を知り、教育効果をあげ、又宗教的世界へと通ずる。この縮圖はある意味では、お墓を中心とした、宗教の百科全書式なパノラマでもあると云ひ得よう。未だ開業して間もないこのお墓は、連日物すごい人出である。これは單なるアメリカ的な物珍らしさだけではないだらうと思はれる。

芝園だより

◎此頃はめつきり宗教放送が多くなつた。だが、それだから聞手が増えたとはいえない。ラジオ全體が老張したのだから當然である。

新しい企畫が望まれる。

◎本誌も有縁の方々の協力によつて増々多數となつて來た。北川氏は既におなじみの美術史家、その著秘佛開眼は餘りにも著名である雲藤氏は中山文化研究所を切りまわしつゝ、教學研究に精進されている新鋭。中山文化研究所の佛教界に果たす役割は高い。

◎櫻のたよりもボツボツという昨今、蛙ではないが、ソロソロ床を出ようかと、残青の空を眺めて考えております。病床にあつて得たものは限らないが、その中でもありがたいのは寄せられた人々の温い心やりと、起きていては當抵讀んでもいられぬような閑文字に目

をさらし得たこと、春と共に再起したく存じます。よろしく。

◎來月は花祭。それに加えて鎌倉大佛の七百年祭。絢爛豪華な編集内容を豫定しております。御期待下さい。(竹中)

◎駐ソ大使カークの後任の噂高いジョージ・ケナンは、「米國の外交、一九〇〇—一九五〇年」なる著書の中で、「今日われ／＼は日本人がほとんど半世紀にわたつて朝鮮、滿州地域において直面し擔つていた責任を引續ぐことになつたが、他國が負擔していたときはひどく低く評價した責任をわれわれ自身が擔つて苦しんでいるのは、意地悪く言えば當り前である」と述べている。勿論ソ連の實質變動を勘定に入れねばなるまいが、關心のひかれる言葉だ。彼等の「責任」「苦しみ」は、いつまでも彼等にあるべきはづはなからう。

◎講和交渉が進むにつけても、ア

ジア諸國の態度は、我々の注意をひく。中國は終戦時、暴に報ゆるに暴を以つてせず、恨みを越えようと述べた。インドは、極東裁判以來、戰勝者の規尺で敗者を視ず、永遠の眞理を基として視なければならぬと云い、セイロン代表は佛教を以つて手を結べと絶叫した。しかし、フィリッピンは、少しでも比島の人々の心と和解しようと送られた日本の子供達のプレゼントさへ拒否する程、惡感情を今に残している。感情の發表方法、宗教、民族の相違かもしれないが、いづれにせよ、我々全ての責任として戦争への嚴しい反省をすべきである。

◎大野法道先生書下しの淨土シリーズ「五重の話」ができました。わかりやすく書かれてあり、五重のすゝめ、受講者への案内書として最適、御利用の程を。

◎臼井氏は最近歸朝の米開教使、來號へも。(龍海)

維持會員芳名(敬稱略)

新保義道(三重)

北村貞三郎(神奈川)

長谷川眞運(靜岡)

誌上厚く御禮申し上げます。

誌代

會費半ヶ年二百圓、一年四百圓(ト共)毎號定價三十圓ト四圓、前金切次第清算通知申し上げます。確實便利な振替を利用して下さい。

「淨土」三月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿七年二月廿五日印刷
昭和廿七年三月一日發行

(定價三十圓)

編輯兼
發行人 眞野正順

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

發行所 法然上人鑽仰會

東京都港區芝公園五ノ一〇
電話 東京八二一八七番
電・芝(四三)一三二八
會費番號B一〇八〇一四

幼稚園教諭養成

文部大臣 指定 **東京高等保育學校**

◆本校は浄土宗報恩明照會が昭和十九年小石川の淑徳高女隣地に設立した幼稚園教諭養成機關です。

◆本年第八回生四十名(定員)を出します。

- 入學案内
- ◆修業年限 一ケ年 募集人員 四十名
 - ◆入學資格 高等學校卒業の男女
 - ◆申込 三月三十日まで 考査料三百圓
 - ◆特典 教諭假免許狀、無試験にて下付
 - ◆規則 書 十圓切手封入 申込まれたし

東京都品川區品川五丁目一〇〇二番地

東京高等保育學校

電話 大崎 七三五九番

西元 宗助

凡人の求道 價八〇圓 送一六〇圓

文學博士 深浦正文

宗教と藝術 價二〇〇圓 送三二〇圓

岩見護

念佛者のおもかげ 價五〇圓 送八〇圓

神子上惠龍

彌陀身土思想展開 史論 價三八〇圓 送五〇〇圓

宗教教育部編(日校)はなくてはならぬ雑誌 價四五圓 送八〇圓

日曜學校研究 價四五圓 送八〇圓

入西院洞西町屋花區京下市都京 永田文昌堂 振替京都636番

大正大學 學生募集

學部

人員 第一學年二百名・第二・三學年若干名

學科 文學部 哲學科(東洋哲學・西洋哲學・宗教學)

史學科(日本史學) 文學科(國文學・米英文學)

社會學科(社會學・社會事業)

佛教學部 佛教學・梵語學・天台學・眞言學・淨土學

試驗 受付 二月一日より三月廿四日まで

期日 三月廿五、廿六日

大學院

人員學科 文學研究科 佛教學專攻(二〇) 宗教學專攻(二〇)

〇〇國文學專攻(二〇)

試驗 三月廿五日

高等學校(夜間)

人員 第一學年(二〇〇) 他學年若干

試驗 一次・三月二十三日 二次・四月十三日

入學案内は二〇圓及び八圓切手貼布宛名記入の封筒を同封して申込むこと

京京都豐島區西巢鴨四丁目

都電・バス・西巢鴨下車